

## 文化・芸術

「凱せん門は、たゞ白くして、  
#もいごとく麗しかりせ」

1930、33年 水彩、色鉛筆  
紙、22・2寸×15・1寸

茂田井武 (1908～56年)

「ton paris」と題した画帖<sup>がびょう</sup>には、100枚に及ぶ自作が収められています。その順番は、決して時系列に並べたわけではないようですが、はじめのうちは、今回取り上げた作品のように、パリという都会の華やきに心をうばわれていることがわかります。

「毎日、皿や小鉢を洗ひながら水曜日を休みにもらひ、まつ第一にエッフェル塔へのぼりましました。赤葡萄酒とコニャックを飲み習ひました。アブサンもおぼえました」(「欧州珍栗毛」〈1949年〉から)と、戦後、茂田井は当時の暮らしを回想しています。

しかし、やがて自身の生活の中で感じたささやかな喜びや悲しみ、さらに人々の暮らしの微妙に目を向けるようになりま<sup>す</sup>。そうした若い繊細な感性と庶民への共感を、やわらかな色彩とナイーブな線によって表現するようになっていきました。

(田中)

### 〈名画の扉〉

大川美術館「茂田井武-パリ青春日記  
ton parisを中心に」展から

